

[[[ヘッドライン]]]

【産学連携学会 第 2 3 回大会（函館大会）6 月 19 日、20 日】

オーガナイズドセッションに関するご報告②

セッション名：イグイノベーションコンテスト推進のための模擬試行について

開催日時：R7 年 6 月 20 日（金）13：00～14：30

会 場：メイン会場

1. 概要 次第/主旨説明・講演（湯本長伯）/講演（木村雅和）/講演（村上晶子）

※イグイノベーション事業研究会と中部北陸支部の共催オーガナイズドセッション

2. 主旨説明～イグイノベーション事業とは、これまで着手されなかった新奇発想に

基づく新しいイノベーション構想・アイデアの実施を意味し、新奇イノベーションを生み出して閉塞した我が国社会状況を突破せんとする事業である。今年の OS では事業の具体的な進行がイメージし難いという反応に応じて「イグイノベーションコンテスト事業推進のための模擬試行」を行った。具体的には『就学年齢を 1 年早め大学院 MC 修了年齢を 20 歳とする』アイデアを模擬的に検証評価するものである。此のテーマを選んだのは、大学余剰問題への国策転換期であることも大きい。2024-5 年度に募集停止を表明した私立大学は 40 校で、国は更に大学閉業への事業助成を示し当面 2 割減を目指すという。

3. 講演（木村雅和・静岡理工科大学々長）～「トップガン教育で地域をブレイクスルー

する」地域の人材育成を早期教育と大学付属校という特殊教育環境で育てる～

文部科学省助成事業からのスタートだが 2009 年より 10 数年を経て地域にも定着し、様々な成果が出て来ている。地域教育・科学技術教育等多面的な広がりを持ち、間違いなく地域活力全体の底上げに繋がっている。大学付属校は教育委員会傘下には無く自由な発想での教育が可能であり、学力も格段に向上し若い人材が大きな夢を描くことに役立っている。木村は創設に関わっただけでなく、現在はトップガン教育システム協議会々長として更なる可能性開拓と地域への貢献に心を砕いている。斯うした我が国教育の改革を目指す多様な事業を横繋ぎにすれば、我が国の幼時から大学院に至る基幹教育の改

革は十分可能である。

詳細及び現状については、当該ホームページを参照下さい。

<https://topgun.ed.shizuoka.ac.jp/> トップガン教育システム協議会とは

4. 講演（村上晶子・明星大学副学長・建築学部教授）～提出された

幼時から大学院MCまでを20歳までに修了するというイグイノベーションアイデアを土両面から検証する（子女の教育長期化と費用増大に苦しむ父母のニーズを踏まえ教育現状を精査する一方、既に短期化高度化を行って評価されている学校や大学院教育の長所も考慮し多角的に評価する）

a 最大の障壁は全国一律に省令通りの教育が義務教育段階から行われ

（いわゆる1条校）、地域性も地域事情も関知せず進める硬直的な建前にある。

実際には置かれた地域事情もあれば自治体の財政事情もあって、建前を保つために無理が行われている。日頃は大学教育に携わる立場にあるので、教育費負担の過大化は大学父母会でも大きな問題であり、教育期間・教育費の圧縮は社会のニーズである。また現状の効率性も深く考える必要がある。明治期に設計された我が国の諸制度は余りに長く十分な検討を経ておらず、敗戦後の修正も民主的な内容への転換はなされたが枠組みは変わらず混乱期の短期間で合った。

b 一方では本当に此れだけ長期間が必要か？という疑問があり時折は問題にも

なるが、一方では753という言葉が有って、高校では7割の生徒が学習内容を理解していない、中学は5割小学校は3割理解してない等の評価が主に教育関係者内に有って、短縮など以外の外という意見が多くなり勝ちである。其処には我が国戦後の教育体制の根幹にある理念が有って、1人でも教育内容を理解出来ない生徒を出さないという高邁な社会福祉の理念で特に義務教育では強固な意見になっている。此の学校教育に不足を感じさせない設計が、一方では過剰や非効率を産み出している。既に高校までは事実上義務教育化し大学等への進学率も止めどなく上昇して来た中で、一つの解決策として所謂ハイレベル校への進学競争が、異常な競争を産んでいる。斯うした不条理な公教育からの退避行動は好ましくない。

c 我が国全体では教育は福祉という意識が強いと言えるが、一方で失われた20年とか社会発展が長期に停滞した時期を経験して、社会革新・総合的イノベーション・産業力増進・国力増進・順調な経済発展への希求も極めて強い。このことと義務教育体制の理念・国民生活への重要性を、何とか折り合わせていく必要があると思われる。1つの体制で総てに應えるのは明らかに難しく、結論的には教育も選択可能性を高めるべきである。

d 大学から大学院（特にMC）への伸長が1970年代に激増し、理工系ではほぼ定着している。大学院教育内容への疑問は以来ずっとあるものの、ただ講義や演習を受けるだけが中心の現状大学教育に比べ、時間設定に自由度が高く・自主性中心の

教育内容・プロジェクト型教育、習得ではなく自発的研究型学習、等々の内容がそれなりに評価されていることを考えると、MCまで含む一貫教育は、有意義だと思われる。

e 人口政策の失敗 f 野放図な社会資源・社会施設計画 g 大学院DC再編 (指摘あり詳細略)
明星大学建築学部 <https://www.meisei-u.ac.jp/academics/architecture/department/>

1. オーガナイザーによるセッションまとめ (湯本長伯・社会構造設計研究所長)

一つのイグイノベーションアイデアにつき2人のコメントを戴き、多角的な議論は出来たと思う。

全国の教育体制を一時に変えるなど実現性は薄いと思われるが、もう一つの選択肢を創り出すということであれば、然程難しいことではないと思われる。静岡トップガン事業への林修氏のコメントもOS内で紹介されたが、以前に同様の立場で予備校運営に関わる方に尋ねたところ、もし新しい構想の選択肢が準備されれば多くの生徒が殺到し、その規模は直ぐに拡大の一途をたどるであろう、という反応であった。今回提案が完ぺきなものと主張するのではないが、多くの人々が我が国教育体制の現状を心配し革新を求めていることも確かであると思われる。筆者が関係した中高一貫校では近年、日本の大学は受験せず評価の高い海外大学を直接目指そうとする学生の数が増えており、まだ表立った大きな社会現象にはなっていないものの、斯うした「大谷翔平」的現象が各界で起きていることは仄聞することで、我が国内に革新的教育環境の受け皿を早期に準備し提供することも、社会イノベーションの大切な局面ではないかと愚考する次第である。また此のOSは、本会・イグイノベーション事業研究会と中部北陸支部の共催であったが、メイン会場の広さに比して余りに参加者少数であった。まずは中部北陸支部にバトンを渡して事業構想への多くの賛同を醸成し、更に多くの方々の衆知を集めて展開をしたいものと考え。

当メールニュースではイベントのお知らせや公募情報等、
産学連携に関する情報をお流しいたします。
会員の皆様への情報の配信をご希望の方は、
産学連携学会事務局 (j-sangaku@j-sip.org) までご連絡ください。